

# 沖縄県うるま市における照間ビーグの調査

豊田 祥子

## はじめに

京都府立大学および同大学院の授業間の連携をはかった合同調査として、沖縄県うるま市の照間地区の文化的景観に関する調査をおこなった。照間地区の主な生業は「ビーグ」（「ビーグ」は方言でい草を意味する）であり、ビーグを中心とした調査となった。

## 1. 調査概要

調査概要は次の通りである。

調査日：2016年（平成28）6月21日～24日

調査地：うるま市照間地区

調査員：近藤史昭（4回生）

豊田祥子（博士前期1回生）

宮下遥（同2回生）

また、聞き取り調査の日程および対象者は次の通りである。

21日：前田一舟氏（うるま市海の文化資料館）

22日：玉城ヒロ子氏

照屋守和氏（うるま市い草生産組合）

花城美果氏

24日：照屋守和氏

照屋守輝氏（うるま市い草生産組合）

仲井間光子氏（照間区自治会長）

## 2. 調査結果

照間地区では、19世紀初めから中頃にかけてビーグの栽培が開始され、2016年（平成28）現在では沖縄県内の生産量の約9割以上を占めるほどの一大産地となっている。

このように生産が盛んとなった理由の第一に、立地の良さがあげられる。集落の北東にある砂浜では天日干しが可能であるため、ビーグ収穫後の乾燥作業に適していたのである。もっとも、天日干しの作業がおこなわれていたのは1970年頃までであり、現在では機械化されている。また、地質条件も理由の1つとしてあげることができる。泥岩層と琉球石灰岩層が重なることによって豊富な湧水が得られ、各農家はビーグ田の近くにため池をつくって農業用水を確保することができたためである。近年はため池の代わりに地下水路を通す計画が進んでいる

そうで、今後のさらなる水利設備の向上が期待されている。

同地区では、ビーグ以外の作物も多数栽培されている。田芋（方言でタームと呼ばれる）は、ビーグと同一の田で交互に栽培されることにより、連作障害を防ぐ役割を果たす。この他に稲やサトウキビなども栽培されており、このような多種多様な作物の組み合わせによって、1年の農業のサイクルが形成されている。

そのなかでも、ビーグ生産が照間の人々の生活に占める割合は高い。例えば、軒を延ばしてつくられた空間がビーグの加工作業に利用されるなど、生業をおこなうために独特な家の造りがみられるためである。

以上のように、照間地区の生業は自然環境を利用しながらおこなわれている。その中核となるのはビーグであり、この地の景観はビーグとともに形成されてきたといえる（写真1）

### 3. 成果報告

前節の結果を踏まえて、ポスター『照間知ってるま！？～ビーグの見える風景～』を作成し（図1）、奈良文化財研究所文化的景観研究集会第8回ポスターセッションに参加した（写真2）。各ポスターについての発表および質疑応答がおこなわれたが、本報告がベストポスター賞学術研究部門（若手研究者）の1つに選出された（図2）。

#### 【謝辞】

本調査にあたり、玉城ヒロ子様、うるま市い草生産組合の照屋守和様・照屋守輝様、照間区自治会長の仲井間光子様、うるま市海の文化資料館の前田一舟様、花城美果様、その他照間地区の皆様には、お忙しい中、多大なるご協力をいただきました。末尾ではございますが、厚く御礼申し上げます。



写真1 照間地区の風景

家屋には、ビーグ生産に使用する機械の収納庫などが設けられている。手前にはターム、その奥にビーグが広がる。

2016年6月24日 豊田撮影



写真2 ポスターセッションでの発表の様子

2016年7月30日 宮下撮影



図1 ポスター『照間知ってるま!? ~ビーグの見える風景~』

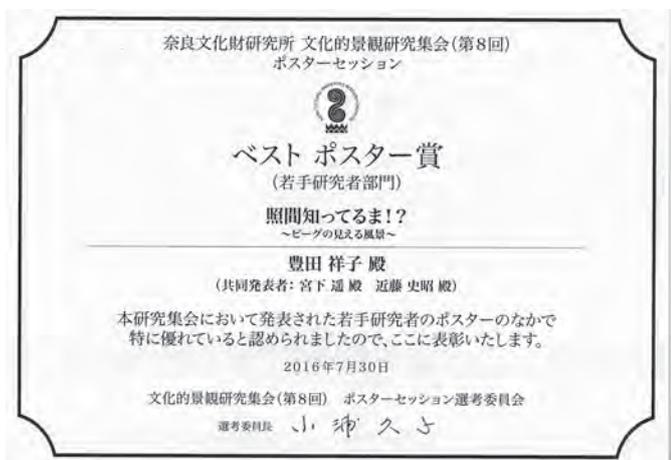


図2 ベストポスター賞表彰状